

競 技 の 見 方

ソフトテニスの歴史

日本のソフトテニスは、明治17年（1884年）に当時わが国の体育界の先覚者であった坪井玄道氏らによって東京高等師範学校（現筑波大学）において行なわれたのが始まりとされており、明治の初期に日本に伝来した近代テニス（ローンテニス）を基に、日本独特のゴムボールを使用するテニス（軟式テニス）が考案され、その後、先駆者達の努力によって全国津々浦々まで普及されました。

軟式テニス大会としての最初の記録は、明治31年の東京高師と東京高商の対抗戦です。明治36年には慶応大学、37年には早稲田大学が加わり4校の対抗戦は大変な人気を博したそうです。

ソフトテニス競技は、平成27年に創始130周年、(公財)日本ソフトテニス連盟創立90周年を迎え、現在では大衆スポーツとして老若男女問わず幅広い年齢層が楽しめるスポーツとして普及・定着し、競技人口も約50万人を数えています。

(公財)日本ソフトテニス連盟は、ソフトテニスの発展のため国際普及活動にも力を注ぎ、韓国・中華台北と共に、東南アジアへの普及活動も積極的に行い、昭和31年からはアジア選手権大会を開催しています。後にこの国際普及活動には中国も参加することとなり、中国では昭和61年にソフトテニスを正式に大学の科目として採用しました。

またアジアだけにとどまらずアメリカ・ハワイ・ヨーロッパ・アフリカ・南米等世界各地でもソフトテニス普及活動を行っています。昭和49年には「国際軟式庭球連盟」結成を成し遂げ、昭和50年にはハワイにおいて「第1回軟式庭球世界選手権大会」が開催されました。

こうして、ソフトテニスは国際スポーツの仲間入りをすることになりました。

平成2年の「北京アジア競技大会」では公開競技として開催され、平成6年の「広島アジア競技大会」では正式競技となりました。この両アジア競技大会の間にソフトテニスの国際化は急速に進むことになります。この流れを受け更なる国際化を図るため、平成4年には100年以上続いた名称を「軟式庭球」から「ソフトテニス」と改め、平成5年からはシングルスを採用とサービス、ポジション、ファイナルゲームなどの変更を柱とした国際競技規則の制定が行われました。

その結果、平成11年に台北市で開催された「第11回世界選手権大会」では、過去最大の26ヶ国（地域）が参加するに至りました。指導者は「世界を目指さないスポーツは衰退する」を肝に銘じ、選手達の「夢」であるオリンピック参加を目標に国際普及の推進に日々努力しています。また、平成16年にも、競技規則を一部変更し「ソフトテニスハンドブック」で対応しています。

国際大会については、平成17年「東アジア大会（マカオ）」、平成18年「第15回アジア競技大会（カタール・ドーハ）」、平成19年「第13回世界選手権大会（韓国・安城市）」（40ヶ国・地域が参加）、平成20年には「第6回アジア選手権大会（韓国・聞慶市）」が開催されており、平成21年には念願であった、第1回国際ジュニア大会を四日市市で開催しました。

平成22年には「第16回アジア競技大会（中国・広州市）」、平成23年「第14回世界選手権大会（韓国・聞慶市）」、平成24年「第7回アジア選手権大会（中華台北・嘉義市）」、平成25年「第6回東アジア競技大会（中国・天津市）」、平成26年「第17回アジア競技大会（韓国・仁川市）」、平成27年「第15回世界選手権大会（インド・ニューデリー市）」、平成28年「第8回アジア選手権大会（日本・千葉）」、平成29年は、「第25回日韓中ジュニア交流競技大会（日本・笠間市）」、そして、平成30年は、「第18回アジア競技大会がインドネシア・パレンバンで開催されました。

ソフトテニスの見どころ

ソフトテニスは、テニスと同じように、ネットをはさんで相手と向かい合い、ラケットを使ってボールを打ち合ってポイントを競います。自分のコートに飛んできたボールをノーバウンド（コートに一度もつかない状態）か、ワンバウンド（コートに一度だけついた状態）で返します。

ソフトテニスの試合にはダブルスとシングルスがあり、対戦方法としては個人戦と団体戦があります。国スポの場合は、2015年の和歌山国体からダブルス・シングルス・ダブルスの都道府県対抗の団体戦で行われ、「成年男子」・「成年女子」「少年男子」・「少年女子」の4種別で試合が行われます。

各都道府県の代表チームは、監督が作戦を練り相手チームの特徴などの情報を集め自軍との比較により、出場選手（オーダー）を決定します。ダブルス2ペアシングルス1プレーヤーのうち2勝しなければ負けとなるため、どのプレーヤーを1番（ダブルス）、2番（シングルス）、3番（ダブルス）に起用するかが作戦として大切になります。

ソフトテニスのダブルスの魅力は、ラリー（球の打ち合い）が続くことと、2人のプレーヤーのコンビネーションの妙技にあります。

ラリーの見どころとしては、シュートボール（速いボール）での打ち合いの迫力はもちろん、ロビング（山なりのゆるいボール）やショートボールを織り交ぜた多彩な攻撃や、スマッシュやボレーなどの華麗なネットプレーが挙げられます。

コンビネーションは、パートナー同士がお互いにカバーし合うだけでなく、相手陣形を崩すような配球をしたり、ポジション取りを変えたりすることによって、味方のプレーヤーがポイントしやすいようにプレーしたり、相手のミスを誘ったりすることもあります。このようなことは平素からお互いの気持ちが通じ合っているから可能なことであり、ダブルスならではの魅力です。

シングルスでは、対戦する両プレーヤーの敏捷性や巧緻性、パワーや状況判断力、プレッシャーへの抵抗力、集中力などが勝敗の鍵になり、団体戦の2番目に入りますので、チームの勝敗の分かれ目となります。

ダブルスの特色である2人で協力して1ポイントを獲得するラリーの応酬はもちろんですが、より攻撃的なフォーメーションである2人のプレーヤーがネットに付き、ボレーやスマッシュでポイントをしたり、ソフトテニス独特のカットサービスを行うこともあります。

シングルス選手の個々の技と能力にも注目すると、またひと味違った競技の楽しみ方ができるはずです。